

障害児・者に対する身近な楽器による表現を促すための活動（第四報：奏法譜）

一 演奏活動を促すための、色と数字による“奏法譜”の工夫 一

（文中、セラピストは Th.、クライアントは Cl.と記す。）

MGW研究所 都築裕治

【目的及び対象者】

五線譜はある種の共通語であるが、知的なハンディを持つ Cl.にとっては修得が難しく、これにより楽器を演奏するのはかなり困難である。ピアノ演奏に関しては通常の五線譜によらない奏法譜が幾つか考案されているが、どれもなじみのない記号やシステムによるものであり、そのことでむしろ混乱を招くこともある。そこで、筆者の対象とする Cl.（知的障害、自閉症、ダウン症等、幼児～成人まで）に対し、比較的簡易な形での楽器演奏を成立させ、その達成感を感じてもらうための道具となる“奏法譜”を考案した。その奏法譜の効用について活動事例を交えて報告し、Cl.の音出し表現を促すための一資料に資したい。

【方法】

1. 奏法譜活用の発想：以下①～④の発想による“奏法譜”を作成し、これを用いて Cl.に応じた楽器での演奏（音出し）を働きかけ、この奏法譜による各種楽器での展開を図って行く。

① 色による手掛かりをつける（色は弁別の基礎的要素）。② 数字による手掛かりをつける（数字はなじみの記号）。③ Th.の伴奏音の使い方を工夫する（Cl.の音に広がりを与えられるようにする）。④ 幾つかの楽器での共用を図る（通常、奏法譜はそれぞれの楽器に固有のものであるが、それぞれの楽器に応じた目印の工夫で対応する。）。

2. 色数字譜：上記を踏まえ、“色数字譜”を構成した。このルールは以下の①～④によっている。

① 以下の音に、赤 or 青の数字を対応させる。ドー1赤・レー2青・ミー3赤・ファー4青・ソー5赤・ラー6青・シー7青・ドー8赤（この赤と青の手掛かりは、キーボード演奏する際の簡易な和声付けにも利用される。6、7で青が続くのもこれに関連している。なお、この赤と青の並びはハーモニカの吹音と吸音にも一致している。）。② 伸ばす音には「1ー」「2ー」のように、音の長さにある程度対応した横線「ー」をつけて視覚的に表す（この横線の長さは煩雑さを避けるため、音符での音価の示し方のような正確さはあえて求めない）。③ 短い音は、数字と数字の間隔を詰めて書くことで視覚的に表す。④ いわゆる「移動ド」式での記譜法である。使用する楽器への数字付けと合わせることで、奏法譜として機能させる（例：キーボードのキーへの色数字シールの貼付）。

3. 色数字譜と楽器との結びつけ方：・キーボード／鍵盤に色数字シールを付ける。・ベース／フレットに色数字シールを付ける。・ボタン式ベル／音階順に並べて色数字カードを添える。・リコーダー／指穴より少しずらして色数字シールを付ける。

4. 色数字譜の例：＜メリーさんのひつじ＞（ここでは、便宜的に青色の数字を斜体にて示す）

3-2 1 2 | 3 3 3 - | 2 2 2 - | 3 5 5- | …以下省略

【結果および考察】

キーボード、エレキベース、ボタン式ベル、リコーダーにおいて、それぞれの楽器の特徴に応じて工夫した部位に色数字シールを貼付する事により、Cl.それぞれの形での“演奏（メロディ奏）”が成立した。特にキーボードでは、一本指奏から二本指奏、コード付け奏への展開も見られた（Cl.の状態に応じて、シールの貼り方を段階的に行い、左右の手指の操作を促すことによる）。これらの成立は以下の様に考察される。

1. Cl.への意味：下記①～⑤により、Cl.にとって分かりやすい演奏システムとなり活動を推進した。

① 自閉症の Cl.などでは、数字といういつも変わらない記号が興味と安定を引き出す素材となった。② 数字を追うことでつたなくともメロディになり、演奏が出来ているという満足感・達成感を与えられ、活動の継続へとつながった（セッション中、複数の Cl.から「出来た！」という言葉が度々出された。）。③ 分かりやすいシステムでの活動それ自体が、コール技法の役割を果たした。④ Cl.の演奏（音出し）に対して、その音使いに合わせて工夫した伴奏を Th.が付けていることが、Cl.に対してより完成感を与えた。⑤ 各楽器への目印を工夫することにより、ある楽器での奏法譜が他の楽器での奏法譜ともなり、“横への広がり”を与えた（キーボードでは、色数字のシールの位置を変えることでの簡単な移調奏も実現している。）。

2. 奏法譜としての意味：三味線の文化譜・ギター TAB 譜・ハーモニカや大正琴の数字譜といった“楽譜”があるが、これらは五線譜に対応させたような、音価や奏法等複数の要素が入っている。これに対し、この色数字譜は、楽器演奏の手順のみを Cl.に理解される形でシンプルに示したものである。活動においては、Cl.の良く知っている曲を取り上げた。これにより、色数字譜での手順を追うことで、出てきた音と Cl.の頭の中にあるメロディとが照合され、「出来た」という結果となった。

【結語】

先に、「縦の発達」と「横の発達」という概念により、Cl.の現在持っている力の使いどころをその Cl.に応じて創出し提供することも Th.の役割であることを述べ、その展開例としてリコーダー、キーボード、エレキベースを用いた活動について、Cl.の状態に応じた楽器への仕掛けと使用法に焦点をあて支部大会において順次報告したが、この色数字譜はそれらと一体化したものである。その時の Cl.の持てる力は同じでも、活動で使用する“道具”と“使用法”を工夫することにより、Cl.の表現出来るものに変化してくる。それらの工夫は Cl.の状態（発達段階・能力等）に応じて行われるべきものである。色数字譜による活動もそれぞれの Cl.の位置を見極めた展開をはかって行きたい。